

第3章 整備の目標

3-1 自然再生全体構想の目標

■ 概要

「神於山地区自然再生全体構想」では、3つの理念を掲げ、神於山の自然再生に取り組むことを目標としている。

理念1：森・川・海のつながり

神於山は、大阪湾へ流れ込む春木川の源流部に位置する。山でたくわえられた水は、川となり、やがて大海へ注ぐ。「森・川・海」を一つの自然として捉え、水系一帯の保全を行い、本来、自然がもっている循環機能を回復させ、生き物にやさしい多様な生態系を育む環境を目指す。

理念2：人と自然・人と人のつながり

これまで人は、自然とのつながりを大切にし、多くの自然の恵みを受けることにより生存してきた。神於山における人と自然のつながりを、先人の知恵から学ぶとともに、自然の保全整備の実践とおとして、失われつつある「人と自然・人と人のつながり」の回復を目指していく。

理念3：里山とまちとのつながり

神於山は、数多くの寺院や神社が存在し、昔から「神のおわす山」として信仰されているほか、薪の採取や散策など、私たちの生活と密着した形で独自の森林文化を築いてきた。しかし、近年は、人と里山の関係が希薄になり、里山の荒廃が進行している。まちに暮らす人や子供たちに、神於山と人々との生活や文化的な関わりを伝え、今後の森林文化の継承・発展につなげる。

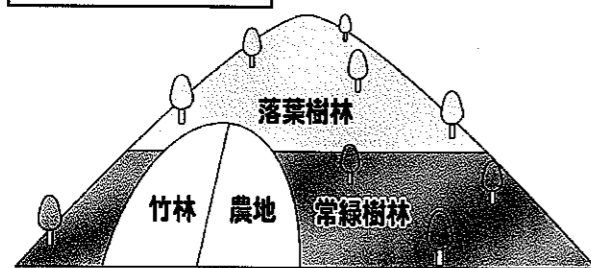
【 目標とする里山像 】

神於山は、植物生態学的にはシイを中心とする暖帯常緑広葉樹林帯に属しているが、伐採・下草刈りなどの人為的な関わりを受けながら、植生が維持されてきた。昭和30年代には、頂上付近や急傾斜地の無立木地であったところもマツ等により植生が回復し、コナラなど二次林が優勢となったが、山麓部は果樹園として開墾され、さらに近年、その果樹園の多くが廃園され、跡地がクズなどに覆われるとともに、マツのほとんどは枯れて消滅する一方、竹林が山麓部はもとより山頂部付近にも拡大している。このように、神於山の植生は時代の変遷とともに大きく変化している。

超長期的には、神於山の植生のイメージとしては、山頂部から中腹部の乾性森林土壌地は、コナラ・クヌギを中心とする落葉樹林帯、中腹部から山麓部にかけての湿性森林土壌地はカシ・シイを中心とする常緑樹林帯を目指すものとする。竹林は、林縁部に常緑の高木性の樹林帯を設ける等を行い、自然の力により拡大を止めていくものとする。なお、果樹園等の営農など農林業の振興を妨げるものではない。

将来に向けた自然再生目標の設定については、里山への再生をスローガンとする「長期的目標」と、竹林対策である「当面の目標」に分別する。

神於山の将来的イメージ
(垂直分布図)



【 里山の再生（長期的目標） 】

方向性1 自然植生の保全と回復

- 貴重種等の生息環境の保護・保全、多様な植生・生物環境の維持・保全を図る。
 - 対策 ・良好な植生の保全を図る
 - ・本数密度の適正な管理（除・間伐）を実施する。
 - ・定期的、段階的な伐採、落ち葉かきを実施する。
 - ・山地部に隣接する農地、ため池の保全活用を図る。
 - ・放置すれば拡大するであろうタケ・クズ・ササの生育を監視する。
- 地域本来の自然植生（郷土種）を育てる。
 - 対策 ・意賀美神社や神於寺などの社叢の植生などを調査し、落葉樹、常緑樹により自然林の育成・回復を図る。
- 人手を加えながら、自然の機能を増進する手法を構築していく。
 - 対策 ・萌芽更新などの樹木更新による森林の活性化を図る。

方向性2 活力ある森の再生

- 林相改良等森林整備を行い、土砂の流出及び崩壊を防ぐ、また、土壌の保水力を高め、水資源の涵養を図る。
 - 対策 ・落葉広葉樹林（コナラ、クヌギ等）や常緑広葉樹林（シイ類、カシ類等）の保全・誘導を主体とするが、アカマツ林や植栽されたスギ・ヒノキ林については、適正な管理を基本とする。
- 適正な本数密度、針広混交林など、生態的に健全な樹林への誘導を図る。
 - 対策 ・針葉樹林は本数密度管理が重要であり、適正な間伐の実行を図る。
- 森林の整備・管理を適正かつ継続的に行うため、効率的な路網の整備を図る。道路等の整備については、自然環境への負荷を可能な限り小さくする工法を検討する。

方向性3 市民が親しめる自然の再生

- 点在する歴史・文化資源との調和を図る。
 - 対策 ・世代間交流や学習体験ができる場を保全・整備する。
- 環境学習、散策など市民の保健休養の場としての機能
 - 対策 ・保全活用の計画づくりや維持管理において、積極的な市民参画が得られる活動となるよう自然体験型の行事や環境学習等を行う。
 - ・炭焼きや散策道整備での利用、イベント時での活用等を図る。
- 神於山のランドマークとしての働き、神於山からの眺望の向上を図る。
 - 対策 ・クズ等の繁茂地など荒廃地を森林に再生する。
 - ・展望地にふさわしい箇所については、施設整備や樹種について検討する。
- 自然の回復力をこえる過度な利用（オーバーユース）を制限する。
 - 対策 ・適正な利用の仕組みを検討し、計画・実施後には検証を行う。

【 竹林の適正な整備（当面の目標） 】

方向性1 竹林の拡大防止

- 現状より、竹林を拡大させない。
 - 対策 ・二次林・針葉樹林へのタケの侵入を防止する。
 - ・タケが侵入あるいは侵入するおそれがあるときは、タケの伐採を行って二次林等の劣化、消滅を食い止める。健全な樹木は残しつつ、タケを必要期間（3～5年間）伐採し、必要に応じて郷土種の補植をして、植生の早期健全化を図る。

方向性2 竹林の適切な管理

- 竹林の密度管理を行う。
 - 対策 ・竹林の拡大防止と健全な林地の保持、景観の保持のため、ha当たり6000本以下に密度管理を行う。

方向性3 タケの利活用の推進

- タケの利活用を推進し、その継続実施を図る。
 - 対策 ・密度管理を行い、優良竹材・タケノコを生産する。
 - ・竹材の農業用利用、竹炭や竹チップとしての生産の拡大を図る。
 - ・タケの林外利用の促進を図るため、イベントなどでPRを行う。

自然再生理念

- ① 森・川・海のつながり
- ② 人と自然・人と人のつながり
- ③ 里山とまちとのつながり

自然再生目標

- | | |
|---|--|
| <p>(1) 長期的目標
(100年間の目標)</p> <p>「里山の再生」</p> <p>① 自然植生の保全と回復</p> <p>② 活力ある森の再生</p> <p>③ 市民が親しめる自然の再生</p> | <p>(2) 当面の目標
(今後10年で取り組むべき目標)</p> <p>「竹林の適正な整備」</p> <p>① 竹林の拡大防止</p> <p>② 竹林の適切な管理</p> <p>③ タケの利活用の推進</p> |
|---|--|

第3章 整備の目標

3-2 自然再生整備のゾーン区分

■ ゾーニングと森林整備目標

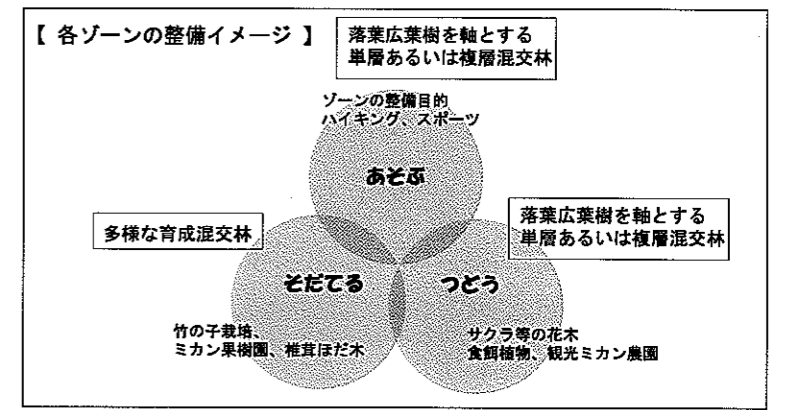
神於山地区自然再生全体構想では、自然環境資源（希少植物や大径木）や社会環境資源（歴史・文化資源や周辺の土地利用）の特性により、5つのゾーンに区分している。

このため、各ゾーンの特性に応じた自然再生を図ることが必要であり、今回、事業実施計画区域に該当する、主な3つのゾーンについての整備の方向性を以下に示す。

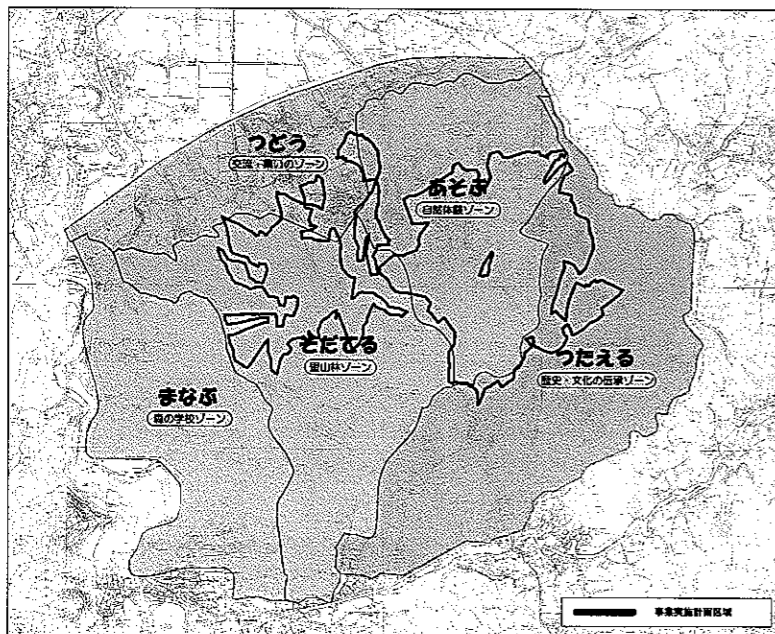
「自然体験ゾーン -あそぶ-」：活動的なアメニティの高い空間づくりを目指すため、落葉広葉樹主体の単層あるいは複層混交林を目標樹林とする。

「里山林ゾーン -そだてる-」：生産性の高い樹林を目指すため、多様な林内構成種の育成混交林を目標樹林とする。

「交流・憩いのゾーン -つどう-」：山の玄関口を目指すため、花木を中心とした落葉・常緑混交林の単層あるいは複層混交林を目標樹林とする。



事業実施計画区域は、全体構想で示された整備区域ゾーンのうち、「自然体験ゾーン-あそぶ-」「里山林ゾーン-そだてる-」「交流・憩いのゾーン-つどう-」の一部を主として対象とするものであり、整備目標として「各ゾーンの方向性」を十分に考慮し、各ゾーンの特性を引き出すための樹林形態や構造を提示する。



各ゾーンの方向性	
あそぶ	自然体験ゾーン 神於山と神於池公園の連携した自然体験・観察ゾーン スポーツなどのあそびを中心とした神於池公園の延長線上に、神於山の里山環境を位置づけ、自然環境の体験を目的とした、「あそび」空間づくりを目指す。
まなぶ	森の学校ゾーン 昆虫観察や植物観察を通じて、賢い生き物について学ぶゾーン 産直神社では、固有性の木本類（ホトトギス、スギなど）が見られる特徴的な地域である。また、クヌギ・アベマキなどの巨木も多く見られることから、カブトムシなどの昆虫類を始め、多くの動物にふれる、自然を「まなぶ」空間づくりを目指す。
つたえる	歴史・文化の伝承ゾーン 神於山周辺に伝わる歴史・文化を知り、人々に伝えるゾーン 神於寺を始め、ゾーン内には歴史・文化に縁のある社寺・史跡が点在する。これら歴史の点を繋ぐことにより、神於山周辺の歴史・文化を印象づける「つたえる」空間づくりを目指す。
そだてる	里山林ゾーン ふるさととしての里山を保全・再生するゾーン 貴重植物（カギカズラ）の生育や採集が確認されており、近年竹林の拡大により豊かな環境が失われつつある。そのため、里山林を保全・再生すると同時に、多様な「里山林」環境を目指す。
つどう	交流・憩いのゾーン 神於山周辺で採れた果物や農作物を提供・販売し、多くの人が楽しむ（つどう）ゾーン 地域住民及び将来的には域外からの利用を目標とし、ハイキング客やボランティア活動などの利用者の増加を図り、様々な人々との交流の図れる「つどう」空間づくりを目指す。また、農産物販売所や休憩場所を設置することにより、「憩い」の空間づくりをも目指す。

樹林整備のあり方

【林冠型】

落葉広葉樹を優占種とする 単層あるいは複層混交林

【林内構造】

林内における利用行為を考慮しつつ、明るさや広がりのある空間を維持し、場合によってはヤマザクラ、ヤマツツジ、ヤマモミジなど花木、芳香木等を導入し、景観の醸成に努める。

【林冠型】

林冠の本数調整伐による多様な林内構成種の育成混交林

【林内構造】

多様な植物社会の維持・向上を図るため、林冠の本数調整伐による林内環境の改善を図り、クヌギ、コナラなど自生種が生育できるようにする。

【林冠型】

落葉・常緑性種の混交林の単層あるいは複層混交林

【林内構造】

森への誘いを喚起するため、グミやカキ、ムラサキシキブなど実の生る木や花木の導入を図り、視覚や聴覚による効果をねらう。